

この今までいいの？

城山中学校 三年 鈴木 翔大

学校が終わって、その日は部活もなく、僕はのんきに帰宅していた。横断歩道を渡り、ドラッグストアを通り過ぎると、僕の家が見えてくる。暑いし、帰つたらまずアイスでも食べようかな、なんて思いながら歩いていると、ごみ捨て場が見えた。いつ見ても汚い。その上の電線にはカラスがとまり、「カアーカアー」と目覚まし時計の音にもしていいくらいうるさく鳴いていた。カラスも頭がいいもので、ごみが出ていると、網をひっくり返して中をあさり、食べ物を盗んでいく。そして散らかすだけ散らかして、飛び去ってしまう。まるで極悪泥棒だ。でも、こうなるのも無理はない。なぜなら、指定された曜日や時間帯ではないときには、ごみを出す人がいるからだ。

そうやってごみを出す人は、どんな気持ちで捨てているのだろうか。ごみ捨て場が汚くなる未来が見えていないのだろうか。だから僕は、このごみ捨て場を見ると、不愉快な気持ちになってしまふ。こう思つてるのは僕だけではないはずだ。その日、僕はただ汚れたごみ捨て場を見ただけで、何もせず家に帰つた。

それから数日後、父が外から帰ってきたときのこと。父は悲しげで、どこか怒つているような表情をしていた。気になつた僕が「なにかあつたの？」と聞くと、話の内容はあのごみ捨て場のことだつた。父は、母と一緒にごみ捨て場を片づけてきたという。僕は「どうして自分たちで片づけようと思ったの？」と聞いた。父は「自分たちのごみ捨て場があまりにも汚くて、情けなくなつた」と言つた。しかも、片づけたのは今回が初めてではなくこれまで何度も何度か掃除していると話していた。そのとき、僕の中に尊敬の気持ちがわいた。「誰かがきれいにしてくれるからそれでいいでしょ」という考えではなく、自分から動こうとする姿勢が、僕の心中に強く残つた。さらに驚いたのは、片づけをしていたのが父と母だけではなく、近所の人たちも手伝つてくれていたということだ。父や母のように、進んで行動しようとする人が他にもいたことに感動した。

地域の人たちの思いやりのある行動を聞いて、僕はふと思い出した。これまで僕は、ごみ捨て場の近くを通るたびに、「汚いな」と思いつつ、誰かが片づけてくれるだろうと人任せにして、見て見ぬふりをしていた。ごみ捨て場は、自分のものではなく、家族のものでもない。地域のみんなのものだということに、ようやく気づかされた。

これらの出来事は、僕にとつてこれまでの意識を変えるきっかけとなつた。父や母、近所の方々のように、僕も地域やまわりの人のために、自分で考えて行動できる人間になりたい。とても些細なことでも、その行動が誰かにとつて「心に届く一歩」になるなら、それは大きな意味を持つはずだ。「汚いな」と感じながらも行動に移さない人は多い。僕もその一人だつた。自分一人でごみ捨て場を片づけるのは少し勇気がいる。不安もある。けれど、近所の人たちが手伝つてくれていたと聞いて心が軽くなつた。周りには助けてくれる人たちがいる。

みんなで力を合わせてきれいにすれば、ルールを守らずにごみを出す人も減ると思う。そうすれば、カラスに荒らされることも少なくなるはずだ。だからいつか僕たちの手で、今は汚れてしまつているごみ捨て場を、「気持ちの良いごみ捨て場」と呼ばれるようにしたい。そんな場所が、僕たちの地域にもつと広がつていけば良いと思う。僕には今、未来がはつきりと見えていく。